

ほんとは怖い星座物語 春夏編

母子熊

桃の花が咲き始め水温む早春のころ、星空を眺めると天の西半分にはまだ冬の名残を留めています。北東の空に昇ってきた北斗七星を見るとき、南東の空にししの大鎌を眺めるとき、春の訪れを感じます。北斗七星は六つの二等星と一個の三等星とでひしゃくの形を作り、北極星のガイド星として昔から親しまれてきました。古代中国人はこの七星を大きなひしゃくあるいは天帝の車になぞらえました。ギリシア神話ではこの七星は非常に広大な星座であるおおくま座に属し、その尻尾にあたります。

ゼウスの愛人の物語はたくさんありますが、そのうち最も有名なものです。カリストはアルカディアの王女で狩と月の女神アルテミスに従うおとめでしたが、狩の途中森で一休みしているとき、ゼウスに愛され身ごもってしまいます。アルテミスは自他ともに誇り高い厳格な性格で、カリストの裏切りを許さず彼女を追放してしまいました。カリストはひそかに男の子を産みアルカスと名づけますが、悲劇はまだ続きます。ゼウスの正妻ヘラは嫉妬のあまり彼女を醜い熊の姿に変えて、狩人に追いかけさせるのです。

それから15年の歳月が流れアルカスは若い狩の名手に成長しました。ある日、大きな熊に出会いこの獲物をし止めようと矢をつがえます。ところがこの熊は襲ってもこないし、逃げようとしません。それどころかアルカスに寄って来ます。それは母カリストの変わり果てた姿だったのです。それを見たゼウスは大慌て、今カリストを救うにはこれしかないとアルカスをも熊に変えて、二人とも天に引き上げました。それを見たヘラは親子熊が休めないように北極近くに持っていったということです。

ふたご座物語

早春の代表的な星座であるふたご座は12星座の中では最も北にあるため非常に見やすく、ギリシアや日本ではほぼ天頂を通ります。名前の由来はカストルとポルックスという2つの明るい星が並んでいるため、ポルックスのほうがやや赤みがかって見えます。この2つの星は同じ方向に見えていますが、もちろんお互いの関係はありません。

ギリシア神話ではこの2星は双子の兄弟とされています。矢を持っているのが兄カストルで、なんとこの二人は卵から生まれました。でも鳥や魚の子ではなく、大神ゼウスと人間スパルタの王妃レダの間に生まれたのです。

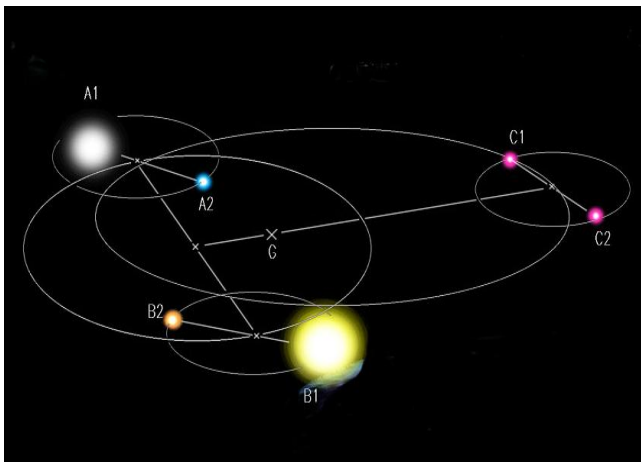
ある日ゼウスは水浴びしているレダに魅せられて白鳥の姿になって、この美女に近づき誘惑しました。月満ちてレダは、大きな卵を2つ産みます。その1つから双子の兄弟カストルとポルックスが生まれました。

二人は仲のいい兄弟で、長じてカストルは剣のポルックスはボクシングの名手になりました。一緒にさまざまな冒険をした中にはイアソンのコルキス遠征の参加も含まれます。カストルはケンタウロスのケイロンから乗馬も習っています。



ところがある日、獲物の取り合いでいとこ達と争い、カストルは命を落してしまいます。ポルックスは兄の亡骸をかき抱いて非常に悲しみ、いっそ一緒に死のうと剣や矢で自分の胸を刺しますが、どうしても死ねません。カストルは人間である母レダの血を、ポルックスは神である父ゼウスの血を引いているからです。ポルックスは苦しみに耐えかねて、父神に自分の命を奪ってくれるよう訴えます。ここでゼウスはカストルを蘇らせるべきなのに、なんとポルックスの願いをそのまま聞き届けてしまうのです。嗚呼なんという父親でしょうね！結局 2 人とも天に昇って星になったというお話です。

さてもう一方の卵からは双子の姉妹ヘレネとクリュタイメストラが生まれました。長じて絶世の美女となったヘレネはスパルタの王妃になるのですが、神々の気まぐれからトロイに連れ去られ、彼女の争奪で全ギリシアとトロイが 10 年間も空しく戦い続けるトロイ戦争（これは史実）という大事件が起っています。このお騒がせの大神である白鳥は夏から初秋の夜空を飾るはくちょう座です。



カストルを望遠鏡で眺めてみると 2 つの 2 等星 A, B に分れて見えます。この 2 星よりやや離れて赤い 9 等星があり、これもカストルのメンバーで C と呼ばれています。ではカストルは三重連星、いやこの A, B, C の 3 星それぞれがまた連星で、結局カストルは六重連星、双子ならぬ六つ子なのです。これは現在知られている多数の星々の中で最も複雑なシステムです。

母神の嘆き --- おとめ座物語

かつて、まだ神々と人々が一緒に暮らしていたころの話です。この世のすべての穀物や果実の生育、収穫はデーメテル(別名ケレス) という女神がつかさどっていました。彼女にはペルセポネ(別名プロセルピナ) という愛娘がいました。ある日ペルセポネが仲間のニンフ(妖精) と一緒に花摘みをしていたところ、いきなり大地が裂けてそこから黒い 4 頭だての馬車に乗った死の国の神ハデスが現れ、あっという間にペルセポネをさらっていきました。ペルセポネは地下の死の国のお妃にされてしまったのです。娘を失ったデーメテルは悲しみのあまり谷間の洞穴に閉じこもってしまい、誰とも会わなくなりました。

さあ大変、大地は荒れて、草木は育たず、穀物は実らず、生きとし生けるもの飢えに苦しみました。人々は、女神の苦しみを取り除くため、何とかペルセポネを地上に返してもらおうよう、大神ゼウスに訴えました。ゼウスは使者としてヘルメスを死の国へ派遣しますが、ハデスはなかなか命令には従いません。ヘルメスも手ぶらで帰るわけにもいかず、辛抱強く交渉した結果、何とか合意が成立しました。

彼女は死の国のざくろを 4 粒食べたので、1 年のうち 4 ケ月は地下の自分の国で暮

らすことという条件で、ハデスはしぶしぶ妻を返すことを認めました。ペルセポネが地上に戻って来ると、デーメテルは喜んで洞穴から飛び出して来ます。すると大地は蘇り、草木はすくすくと育ち、鳥は伴侶を求めて歌います。春が来たのです。ところが8ヶ月後にはペルセポネは地下の国へ行ってしまいますのでデーメテルはまた洞穴に閉じこもってしまい、この世は4ヶ月間冬になってしまうのです。



ハデスとはプルートスの別名で実はゼウスやデーメテルと兄弟の間柄です。つまりペルセポネは叔父(伯父?)に略奪されたことになります。名前からして清楚な物語を期待していた読者には申し訳ないけど、ギリシア神話にはドロドロした場面がたくさん出てきます。この物語を題材にした絵画は多数ありますが、レイトン(1830-1896)の『ペルセポネの帰還』は最も有名なものでしょう。

地下の国から戻ってきたペルセポネ(右下)を迎えるデーメテル(左上)中央の男性はヘルメス
<http://www.h6.dion.ne.jp/~em-em/index.html>

おとめ座は左手に豊作の象徴である麦の穂を持った女神の姿として描かれています。この女神は母デーメテルとも娘ペルセポネとも言われています。母親なのにおとめとはおかしいですが、まあ、あまり気にせずに。麦の穂先に当たるところに青く輝く星スピカはギリシアのみならずエジプトでもバビロンでもインドでも女神を表す星とされてきました。春の大曲線の終点であるこの星は、麦秋のころ南の空に美しく輝いています。スピカとはスパイクと同じく「尖ったもの」という意味です。

てんびん

かつてこの地上は、山には穀物や果物が実り、川にはミルクや酒が流れ、人間は農作しなくてもいつも満ち足りて、何不自由なく暮らしていました。また正義と信仰がいきわたり、権力を振り回す者もいなく、法律なんてものも不要でした。神々はこの世で人々と一緒に暮らしていました。このような平和で平等な時代は「金の時代」といわれています。ところが時はうつり「銀の時代」「銅の時代」となるにつれ、人間は互いに武器を持って、大地を取り合う醜い



争いを繰り返すようになりました。これを見てうんざりした神々は次第に天へ引き上げてしまいましたが、ただひとりこの世に留まった神がいました。その名はアストレア（またはアストライア）、ゼウスの娘、正義の女神です。彼女は人々に正義を説き、悪を退け、悩めるものを救ってまわりました。そのとき人間の正義を測るため使われた道具が天秤です。しかし、そのアストレアさえもついに人間社会の悪にあいそをつかして天に去って行ってしまいました。ちなみに現代は「鉄の時代」で、人間は最後の神さえ追い出してしまい、この大地をわがもの顔で私物化しています。

このアストレアこそ「おとめ座」の正体という説もあります。

ケイロンとその弟子たち いて

夏の夜空には天の川が南北に流れ・・・というのは昔話になってしまいました。南の空、天の川が最も濃いところにいて座が、その北にはへびつかい座がさらにヘルクレス座と続きますが、1等星のないこれらの星座を近畿で見ることはもはや絶望的です。せめてこの物語を読んで天空の師弟の姿を思い浮かべてください。

そのむかし、ギリシアの北の山々の洞窟にはケンタウロス族といわれる上半身は人間で、下半身は馬という化け物が住んでいました。ケンタウロス族は野蛮でしばしばギリシアを襲い、人々は恐れていました。しかしその中でケイロンだけは文武両道に秀でたケンタウロスとして、神々からも人々からも尊敬されていました。彼はヘルクレス、アスクレピウス（へびつかい座）、カストル（ふたご座）、イアソン（アルゴ船）などの若者を育てました。ケイロンは弓が得意で名射手といわれていましたが、ヘルクレスと他のケンタウロスとの争いに巻き込まれ、毒矢に当たって命を落してしまいました。

イラスト提供
中西久崇
(1969－2007)



実は天にはもう一人（一頭？）ケンタウロスがいます。それはフェロスと言う名で、ケンタウロス座になっています。さそり座を挟んで、いて座と向き合っていますが、南天にあるため現在は日本やギリシアからは見えません。

この半人半馬の怪物は恐怖と軽蔑の目で書かれています。馬を知らなかった頃のギリシア人は、北方騎馬民族を怖がってこんな化け物を想像した

のでしょう。ギリシアで馬は利用されなかったようで、ヘラクレスやオリオンなどの英雄も馬に乗らず歩いて旅をしています。馬が出てくる物語は「トロイの木馬」くらいでしょうか。ペルシアとのマラソンの戦いで勝った事を知らせる伝令の兵士も馬に乗らずにアテネまで走ったそうで、馬に乗ればもっと早くできるのに、ごくろうさん

ですね。

医者の祖へびつかい

へびつかいといってもインドの蛇使いとは大違いで、ギリシアでは医師を表します。なぜなら再生不死の象徴である蛇を扱うからです。蛇を掴むへびつかいは医師の祖アスクレピウスの姿です。彼はアポロンの子で、実は生まれる前に一度死んでいるのです。アポロンは何番目かの妻コロニスの不貞を許すことが出来ず（なんと身勝手な！）、彼女を弓で射殺してしまいますが、コロニスのおなかの中には彼らの赤ん坊がいたのです。アポロンはその子だけは助けたいと思い、ケンタウロス族のケイロンに託しました。



ケイロンはその胎児を蘇生させ、養育し、そして学問特に医術を授けました。やがて成人したアスクレピウスはギリシア随一の名医になりました。彼に治せない病はなく、戦いで大怪我をした兵士や不治の病に倒れた瀕死の病人をたくさん救います。彼の医院はいつも満員でした。ところがやがてこの名医は死者をも蘇らせる治療をするようになりました。しかしこれは自然の摂理に違うことで、人間がしてはならないことだったのです。死者が来なくなった死の国の王ハデスは激怒し、ゼウスに訴えます。ゼウスもアスクレピウスを許しておくわけにはいかず、しかたなく彼の頭上に雷を落して命を奪ってしまうのです。さすがの名医も自分自身を治すことはできませんでした。これは筆者の好きなギリシア星物語のひとつです。

なお、アスクレピウスの息子や娘たちはいずれも医術に関わっており、その子孫には医学の父と称されるヒポクラテス（紀元前 400 年ころ実在）がいるそうです。

悲劇の英雄ヘルクレス

ヘルクレスといえばギリシア最大最強の英雄ですが、その一生は生まれてから死ぬまで不幸不運の連続でした。彼の父はオリンポスの主神ゼウスですが、母はペルセウス（ペルセウスもまたゼウスの子）の孫アンビュトリオンの妻アルクメーネでした。この複雑な出生のためゼウスの正妻ヘラに恨まれる運命を負っていました。生まれた直後にヘラが差し向けた蛇に襲われますが、赤ん坊の彼はこれをいともたやすく握り殺してしまいます。ケイロンのもとで武芸百般を修め長じてギリシア一の英雄となりますが、ヘラの呪いがつきまとい発狂して妻と子を殺してしまいます。その償いのためミュケナイ王エウリュステウスに仕え、人食いライオン退治（しし座）や毒蛇退治（うみへび座）地獄の番犬の生け捕り（おおいぬ座）などの 12 の難題を命がけでこな

します。旅の途中コーカサスの山頂では、鎖に繋がれ大鷲に襲われているプロメテウスを救います。彼は人間に火を教えたためゼウスの怒りをかい、この荒山で毎日大鷲に肝を食いちぎられるという拷罰を受けているのです。プロメテウスは神なので死ぬことができず、翌日には傷は癒えてまた大鷲がやって来るという永遠の刑罰はヘラクレスによって消滅したのです。

それらの難題をやっとし終えた頃、ケンタウルス族の悪者ネッソスの計略にかかりヒュドラの猛毒に当たってしまうのです。毒が回ってきて自分の最期が近いことを知ったヘルクレスは自分自身の火葬の準備を始めます。オイタ山に登り山頂に薪を積んでその上に横たわり、友人ピポクテテスに火をつけるよう頼みます。ピポクテテスはためらいながらもヘルクレスの苦しみを見かねてやっとの思いで火をつけた時、稲妻雷鳴とともに空から4頭立ての馬車が現れ、彼を天に運んでいきました。ゼウスは最後になって初めて父親らしいことをしたわけです.....でも遅すぎましたね。

こと

光と音楽の神アポロンと文芸の女神カリオペとの間に生まれたオルフェウスは生まれながらの音楽の天才でした。父から贈られた亀の甲から出来たハープ(竖琴)を奏でると、神や人はもちろん鳥獣も聞きほれ、草木も枝を垂れるほどでした。オルフェウスは妻エウリデケと幸福に暮らしていました。ところがある日エウリデケが蛇にかまれて毒がまわりたちまち死んでしまったのです。オルフェウスは嘆き悲しみ、妻を追って死の国へやってきました。獰猛な番犬ケルベロスもやさしく悲しい琴の調べにおとなしくなり、死の国の役人も心を動かされました。彼は死の国の王ハデスに妻を返してくれるよう必死に奏で懇願します。王妃ペルセポネも涙で訴えたので、ハデスもついに「地上に戻るまで決してエウリデケを見てはいけない。」という条件付でオルフェウスの願いを聞き届けました。彼は妻を従えこの世へ戻る暗くて長い道を歩きましたが、あと一步で地上に着くところでどうしても妻の顔が見たくなり、後ろを振り返ってしまったのです。その瞬間、エウリデケは死の国へ連れ戻されてしまい、二人は永遠に別れ別れになってしまいました。(この部分は『古事記』に載っているイザナギ・イザナミの話とそっくりですね)。

地上に戻ってからのオルフェウスは一切の女性を近づけず、狂人のように野山をさまようようになりました。彼に惚れ込んだトラキアの娘は彼につれなくふられたのを恨み、仲間と一緒にオルフェウスをズタズタに切り刻んで川に流してしまいました。琴は悲しいメロディーを奏でながら、川を下り海を漂い、やがてレスボス島に着きました。島の人々はこれをアポロンの神殿に捧げたということです。

こと座の主星ベガは東洋では七夕の主役である織姫星です。。

